

# 「真実なき時代」を糺す人に！

学長 安酸敏眞

「平成」という時代も今年で終わり、この5月からいよいよ新しい元号に代わります。ですから、皆さんは平成最後の卒業生ということになります。平成の時代は1989年に始まりましたが、世界史的に見れば、フランス革命勃発からちょうど200年目にあたるこの年に、東西の冷戦構造を象徴するベルリンの壁が崩壊しました。また中国の民主化運動が武力で鎮圧された天安門事件もこの年に起こりました。

それ以後30年間、つまり平成の時代に、世相は大きく変わりました。良くなったことでもあります、むしろ悪くなったことも沢山あります。「失われた30年間」という言い方もあるようですが、わたしは今の時代を「真実なき時代」と捉えています。かつて「真実」ということは、またそれに関連して「正直」ということは、人間にとって最高の価値（美德）と見なされていました。昔の人々は「天知る、地知る、我知る、子知る」とか「天網恢恢疎にして漏らさず」という言葉に襟を正しました。誰も知らないだろうと思っけていても、天地の神々は知っている。悪事は必ず露見して、いずれその報いをわが身に受けると言われると、身のすくむ思いがしたものです。しかしひとはもはや真実や正直にそれほどの価値を見出しません。価値の相対化が極度に進み、それまで規範的であった真理・善・正義などは、絶対的規範性を失ってしまいました。フェイクニュースなるものが、今の時代の風潮を端的に示しています。フェイクとは偽物、まがい物という意味です。本物と偽物の区別がつかず、たとえ偽物であっても、自分にとって都合がよく、より強い影響力が期待できれば、平気でそれを利用するという、インターネット社会に特有な風潮が幅を利かせています。

この風潮に関連して、ここ二、三年、「ポスト真実」なる言葉がマスコミに登場するようになりました。これは英語の post-truth に由来するものです。truth は「真理」「真実」、post は「～のあと」という意味ですから、post-truth とは文字通りには「真理・真実のあと」という意味になります。この言葉は2016年6月にイギリスで実施されたEUからの離脱の是非を問う国民投票において、離脱派の主張のなかに「真実でない」ことが含まれていたにもかかわらず、その点こそが有権者にアピールする力をもったことから、「世論を形成する上で、客観的事実よりも感情や個人的信念に訴えることの方が、より大きな影響力をもっている環境の」(OED) という意味の形容詞となります。この「ポスト真実」(post-truth) の現実を、わたしは「真実なき時代」として表現したいと思います。この用法には類似の先例があります。

アラスデア・マッキンタイア (Alasdair MacIntyre, 1929-) の『美德なき時代』という書物をご存知でしょうか。原題は *After Virtue* です。virtue は「徳」「美德」と訳される言葉で、洋の東西を問わず古来人間社会において最も重要な精神的価値の総称です。マッキンタイアは1982年に、わたしが留学していたヴァンダービルト大学に着任してきました。わたしは大学のブックストアにうすたかく積まれたこの本の書名を見て、*After Virtue* とはどういう意味なのだろうかと、訝しく思った記憶があります。after virtue の after は、まさに post-truth の post と同義ですので、after virtue とは「ポスト美德」(post-virtue) ということです。この書名には西洋社会で重きをなしてきた「徳」「美德」の崩壊ということが暗示されていたのです。しかし「ポスト美德」という言葉は、当時と

しては違和感があったのか、邦訳書の訳者はこれを「美德なき時代」と意識しました。わたしが post-truth を「ポスト真実」ではなく、「真実なき時代」と言い表わすのは、これに倣っています。

さて、現代はまさに「真実なき時代」です。米国の現大統領の破廉恥な言動は言うに及ばず、わが国でも加計学園・森友問題や統計不正疑惑問題などに象徴されるように、総理大臣以下、閣僚、官僚もおしなべて劣化が押し進み、虚偽や不正や不真実がまかり通る世の中になっています。しかもその関係者のほとんどが一流大学出身者（官僚の多くは東京大学出身者）だということは、事態の深刻さを物語っています。昨今、「大学改革」がしきりに喧伝されますが、問題の所在は小手先の改革では矯正されない、より本質的な深部にあるように思えます。大学の腐食をいかに食い止めるべきか？ これは教員にとっても学生にとっても喫緊の課題です。「隗より始めよ」という言葉がありますが、わが北海学園大学はこの嘆かわしい時流を糺す、まさにトップランナーでありたいと念じています。

真実とは、「あらゆる点から見て、それだけが偽ったり飾ったりしたところの無いそのものの本当のすがたである」と考えられる事柄（様子）」を意味しています。現代が「真実なき時代」だということは、このような真実を蔑ろにし、それを歪曲したり粉飾したりして、虚偽を真実や真理として押し通そうとする時代だということです。大学というところは、虚偽や不正や不真実とは真逆の、利害打算を離れた真理探究にいそしむところです。しかし皆さんがこれから足を踏み入れる現実の社会は、むしろ虚偽や不正や不真実がときにまかり通るところです。ですから、こういう社会にあって誠実に正しく生きることは、決して容易なことではありません。「みんなで渡れば怖くない」という言葉があるように、われわれ日本人は集団のなかに個を埋没させて、個人の良心や責任感に蓋をして、集団的な不正行為に加担してしまう傾向がありますので、よほどしっかりしていないと足をすくわれます。

かつてルース・ベネディクトは、ユダヤ・キリスト教的な欧米社会を「罪の文化」、日本人のそれを「恥の文化」と規定しました。「罪の文化」がつねに神の目を意識するのに対して、「恥の文化」はとりわけ人間（世間）の目を気にするというのです。しかし現代の日本では、恥という美德すらも怪しくなっています。今や「ポスト真実」だけでなく、そもそも「ポスト美德」という言葉が成り立つほど、破廉恥な出来事が日常茶飯事です。皆さんどうかこういう社会あるいは時代を当たり前と思わないでください。破廉恥な行為を恥ずかしく思う純な心を絶対に失わないでください。しかしそのためには、真実と虚偽をハッキリと見分け、不正には絶対手を貸さない強い主体性と倫理観の確立が不可欠です。

ご存知のように、北海学園大学のスクールモットーは「開拓者精神」です。北海道開拓の時代を思い返してみれば、北海道に入植した人々は、厳しい大自然を相手にしながら、言語に絶する労苦によって、今の北海道の基礎をつくり上げたのです。大自然の前では虚偽や不正は一切通用しません。真実かつ誠実な努力の積み重ねのみが、未曾有の大業を成し遂げたのです。ですから、「開拓者精神」を掲げる大学の卒業生として、皆さんはこの「真実なき時代」に迎合したり、その風潮に流されたりすることなく、むしろこのような時代を糺す人になっていただきたい。「開拓者精神」を身に付けた人とは、労苦を厭わず剛毅朴訥な真心のある人のことです。これが卒業式にあたり、学長として卒業生の皆さんに申し上げたいことです。これをもって学長式辞とさせていただきます。